

おさなここち(幼心地) その十

「じぶとりじいさん

南出喜久治

(平成22年12月21日記す)

「じぶとりじいさん」の話を知っていますか。よく冗談で言われることですが、「じぶとり」と言っても、少し太ったおじいさん(小太りじいさん)の話ではありません。これは、平安後期の今昔物語集、鎌倉初期の宇治拾遺物語という昔の書物にもその原型がみられるお伽話で、世界にも同じような話やこれによく似た話もあります。これとよく似た話や少し変わった話などが多くありますが、念のために私なりに標準的な話として要約して説明しますと、次のような話です。

昔々あるところに、右頬に大きな重い瘤がある爺さん(右瘤爺さん)と、左頬に大きな重い瘤のある爺さん(左瘤爺さん)が隣同士で住んでいました。二人ともその瘤があることに不便を感じていましたが、右瘤爺さんは正直で無欲な人で、じゃまなはずの瘤にも大層愛着を感じていましたが、爺さんは意地悪で欲張りな人で、瘤があることが嫌で嫌でしかたがありませんでした。ある日、右瘤爺さんが山に仕事に行くと、突然雨が降ってきたので、近くにあったお堂に入って雨宿りをしたところ、ついついお堂の中で眠ってしまいました。目が覚めると、あたりは真っ暗になっていて、お堂の近くに鬼が集まって楽しんで歌って踊って酒盛りの宴会をしています。右瘤爺さんはその楽しい雰囲気にも自分も楽しくなり、鬼の怖さも忘れて踊りながら鬼たちの宴会に加わってしまいます。鬼たちは驚きましたが、右瘤爺さんの踊りが大層上手で楽しいので、鬼たちも感心して爺さんに酒やご馳走をすすめてみんな楽しく過ごします。宴会が終わると、鬼た

ちが次の晩にも踊りを見せてくれるように右瘤爺さんに命じ、明日来ればこの瘤を返してやると言って、右瘤を一気に引っ張って傷も痛みもなく取ってしまいました。右瘤爺さんが山から家に帰ってき、奥さんのお婆さんにその一部始終を話しましたところ、その話を盗み聞きした隣の左瘤爺さんが、自分も瘤を取ってもらおうと考え、次の日の夜更けに同じところにてかけました。すると、やっぱり鬼たちの宴会が始まりました。ところが、左瘤爺さんも同じように踊って見せたものの、鬼が怖くておどおどするため、うまく踊りができず鬼たちはそれが気に入りません。しかも、瘤を取ってくれとせがむので、とつとつ鬼たちは怒って、右瘤爺さんから取り上げた瘤を左瘤爺さんの右頬に押しつけてくっつけました。このようにして、右瘤爺さんは瘤がなくなりすっきりしましたが、左瘤爺さんは両頬に重い瘤をぶら下げることになって苦労することになりました、とさ。

まあ、ざっとこんな話です。これにさらに枝葉が付いたり、少し違った事情などが加えられたり、削られたり、別のものに変えられたりするものも数多くあります。しかし、いろいろな変形はありますが、大筋ではこのとおりの話です。

この話には瘤が話題に出てきます。このような瘤はガンのような悪性のもではなく、いわゆる良性のものです。外科手術や整形手術のない時代の話ですから、悪性のもも良性のものも、それを取り除く秘術などがあったことが語り継がれてきたという歴史的な背景があるようです。強さと優しさとは表裏の関係にありますから、一般には人々に害を為すような強い力を持つ怖い鬼であれば、痛みや出血もなく瘤を取るような人のためになる秘術の力も持っているとして、鬼も人間と同じように宴会を楽しむ愉快でおどけた側面があることを描いています。

しかし、この話には必ずしもあまり深い意味もなく、明確で道徳的な教訓がある話ではないと言われてきました。それどころか、多くの矛盾や疑問が指摘されています。まず、「舌切り雀」についても同じこ

とが言われますが、「瘤取り爺さん」ではなく「瘤取られ爺さん」とすべきではないかということです。そして、鬼は瘤が爺さんにとって大事なものであると思っ、それを次の晩にも来てもらうために形に取る(質草にする)ことにしたのですから、もし、右瘤爺さんが本心から瘤に強い愛着があるというのであれば、それを約束通り次の晩に取り返しに行かなかったのは何故なのですか。鬼が左瘤爺さんと右瘤爺さんを見誤ったはずはないのに、右瘤爺さんの瘤をどうして右瘤爺さんが来たときまで預かっておかなかったのですか。など、いろんなことが言われてきました。太宰治という作家も、「お伽草紙」という作品のなかで「瘤取り」を取り上げ、独特のユーモアで「瘤取り」話をからかっています。

では、私たちは、この瘤取り話をどのように受け止めたらよいのでしょうか。これまで疑問が出されてきたように、たとえ、へそ曲がりとか、理屈っぽいと思われるも考えてみる必要はあります。当たり前のことや理解できないことを、なぜだろう、どうしてそうなるのだろう、と考えることは大切です。エジソンが小学校の先生を質問攻めにするために小学校に行けなくなったとする逸話や、そのような性格であったために、遂には発明王と呼ばれる人になったのも、誰もが疑わない当たり前と思われることにも疑問を持ち、自分が納得するまで追求し、その素朴な疑問を大事にしたためです。

しかし、だからと言って、昔から伝わっている話を今の知識だけで判断して、迷信だ、非科学的だ、などと即断して否定したりすることはできません。それこそ非科学的な態度なのです。真理を伝える場合、例え話をすることが多いのです。むしろ、例え話でなければ真理が伝えられないこともあるのです。古くから長く語り継がれてきたことには、何らかの意味があるのです。話の形式や内容にこだわることなく、話の持っている雰囲気を受け止め、その話に託された深い意味を感じ取ることが大切です。

この話の原作的な話が宇治拾遺物語にあります。そこには、「ものうらやみはせまじきこと」(怨んだり妬んだりしないこと)の教えと

して受け止められていきます。他にも、正直で欲のない者が得をして、意地悪で欲張りな者が損をするということ。話が組み立てられていくと、考へも語られていきます。

また、こんな考へもありです。右瘤と左瘤というのは、右脳と左脳の喩えであるとするものです。すぐれた人になるには、図形や空間構成などの認識、音楽感覚、直感力などの働きをする「右脳」と、言語や文字、計算などの情報認識、論理的な判断力などの働きをする「左脳」とのバランスが大切であり、左脳偏重では不幸になることを昔の人は知っていたと思われれます。右脳と左脳とのバランスは「本能」と「理性」、「家族」と「個人」、「祭祀」と「宗教」のバランスとも共通します。これは、この話についての私の受け止め方ですが、皆さんもこの話を題材にいろいろと考へてみてください。